

# 展勝地風土記

Vol.21

平成29年7月28日

展勝地開園100周年記念事業準備委員会  
問い合わせ／北上市都市整備部都市計画課 ☎72-8279

展勝地開園100周年記念事業準備委員会、100周年に向けた取り組みとして、より多くの市民に展勝地を知っていただくため、展勝地に関するさまざまな情報を紹介しています。歴史的なこと、地理的なこと、自然環境のこと、そして、展勝地に深く関わった人々や展勝地を題材にした美術・文芸作品などについて紹介していきます。次回は10月27日に発行します。

## 自然の中に生きた沢幸さん

藤原 八弥

展勝地造園の経緯については『展勝地五十年誌』をひもといていただくことにするが、最低次の引用だけには必要のようだ。大正9年5月30日の和賀新聞に掲載された「展勝期成と黒沢尻繁栄のために」と題する沢幸さん(※)の寄稿の一節である。

「…他郷人を引き寄せたるにたるの風光はわが黒沢尻の近傍に確かにある。しからばどこにあるか。わが黒沢尻の東、北上川沿岸一帯の風光はすなわちそれである。明媚の二字はいまだもつてかの風光を形容するにたらぬ。明媚はおうおうにして規模の小たるを意味するのが通例であるが、この風光は明媚をはるかにこえて壮大な眺望をもつておる。自然の巨手によって配置されたる山水の形勢は一々に秀絶、佳絶、総合し

てこれを大観すれば雲山は蒼々たり、江水は淳環たり、天空快闊まことに求めやすからざるの風致である。天成の一樂園だといつてもよい」

展勝地一帯の景観は「風光明媚」などというありきたりの慣用句では言い尽くせないのだ。満開の桜並木の下をぐり抜けただけで展勝地を知ったことにはならないのである。

沢幸さんがこの河岸に桜を植えたのは、国見山頂上から眺望する天地水の圧倒的な広がりの中において考えられたであろうことは明白である。

かつて沢幸さんは会うたび私に「朝明けは美しい！朝の川岸から見た展勝地を描いてみなさい」と話された。この地方に住んで川岸から見

る、北上川と展勝地の山々との天の配材を知らない人は不幸である。音もなく言葉もなくゆるやかに流れる北上川は、それだけによい人々の内にひそむ心呼び起こすように語りかけてくる。やがて東山が明け、大地をピンクに染めるころ、対岸の小鳥はいっせいにさえずりはじめ

る。川面には小魚がピンと飛び、そのあとに波紋が連鎖して広がり消える。そこに竿を垂れてならぶ釣人たち…。まさに生命の充実を感じとれる一時ではあるまいか。沢幸さんが称賛されたのは、単に風景の美しさのみを語ったのではなく、自然が人間に働きかけ、自然と人間の生命が輝きを得て調和する瞬間をそこに見られたからではないだろうか。さんご橋の上に立つ。北上川はゆ

るやかなS字を描いて川下に流れていく。この流線美とほどよい川中を備えた光景は、他に自慢できる美しさだ。

また月夜のさんご橋は月光に輝く北上川の流れに誘われて橋上にたむろし夕涼みする人々が多かつたが、昨今は夜中も絶えず車が行き交い、月を写す川面も清らかさを失って、その诗情も今では思い出さなくなってしまった。

このさんご橋が今日のようにモダンな橋に生まれかわるにあたっては、やはり沢幸さんの働きが大きかつたと聞くが、沢幸さんとさんご橋を結ぶ次のようなエピソードがある。大正14年9月20日の和賀新聞の記事であるから、まだ木橋の時代である。

※ 沢幸さん(澤藤幸治) 展勝地育ての親。大正9年和賀展勝会を結成し、翌年展勝地を開園させた。昭和9年から黒沢尻町長を2期、12年から終戦まで県議会議員を務める。35年没。43年に市民の手でみちのく民俗村入口に銅像が建てられた。

展勝地の開園は地元立花の農民たちの犠牲があつてはじめて可能であつた。畑をつぶされた地元農民は沢幸さんを恨んだ。ある日、桜並木を手入れしていた沢幸さんは、4、5人の農婦に「桜を植えて骨を折つたからって何になるのすや」と詰問された。答えに窮したこの時、口からとつさに「この桜はアノさんご橋！立花村の人達が毎日渡るアノさんご橋の命を繋ぐ桜だ」と口をついて出た。すると女達の第三の声はやや詰問的に「その桜はいつになつたら橋を架けるような木になる？」と云うのである。私はこの桜を伐らなくとも、こうして年々美しい花を咲かせて皆をよるこぼせながら、アノさんご橋を永久に安全に、皆の渡るにさしつかえないようにしてくれる。つまりこの桜はさんご橋の命の親とでもいふべき桜であると…。



沢幸翁顕彰銅像建立記念誌「野に叫びあり」

沢幸さんが無意識のうちに発したこの言葉に、桜を植えた真意があるように感じられる。「さんご橋の命を繋ぐ桜」ということは、立花の人々のみならず、この地方の人々の命を繋ぐ桜だと言いたかつたのではなからうか。

展勝地の絶景はなんと云つても陣ヶ丘登山からの眺めである。遠くに数々の奥羽の秀峰をのぞみ、山ひだから流れてきた和賀川は眼下で北上川と合流する。二つの川の流れの速さと水の色の対照、そして自然が造形する中洲。和賀川を合わせた北上川は美しい曲線を描きながら稲瀬の渡しから男山のかげに消えていく。広々とした西山の裾には和賀の野が広がり、その中に躍進する北上の中心街がある。ここまではその喧騒は届かず、かえつてその町に生活する人間の息吹が川音となつて渡つてくるようである。陣ヶ丘に立つ私たちはしばしのあいだ恍惚境に身をあずける。

「桜の名所は日本国中いたるところにある。展勝地の誇りは桜よりも、天から与えられたアノ豪壮雄大なる展望である。これに配する花…：桜の名所にかくの如き魅力をもつところは他にあるだろうか」「共存共栄」昭和11年4月号）陣ヶ丘の南、男山はそれ自体の風

貌も展勝地に威厳を加えているが、この頂上からの眺めは陣ヶ丘と和賀・北上の合流点が重なって、男性的で険しい。

展勝地絶景の極はなんと云つても国見山頂上からの眺望であり、ここからは文字通り四方を一望に眺めることができる。奥羽山脈と北上山脈の対称を手にとるように見ることが出来る。ここから見る早池峰山、五葉山、種山高原、東稲山などのたたずまいは西の山と違った味わいに加えている。国見山には、その歴史に裏打ちされた靈気、靈感とも呼ぶべき感動がある。約千五十年前、東北の比叡山として仏教文化の中心で、頂上に金福山大悲閣が立てられ十一面観音がまつられ、これを中心に周辺は数百の塔堂伽藍が配され、さながら極楽浄土の様を呈していた。仏道の修業・修練の本拠地であつた国見山は同時に東北地方の開化の出発点でもあつたのである。

中央地方の有名人士が訪れるたびに、果たしてこの歴史がよみがえつたかは知る由もないが、常にこの地方の発展を東北全体の発展の中に壮大に位置づけた沢幸さんであつてみれば、その昔この国見山山頂から東北の明日の姿を描いた慈覚大師らと通じる志を、沢幸さんもまた持った

に違いない。案内した客人に、北上平野のあちこちを指さしながら、自らの構想を熱意を込めて語る沢幸さんの姿が浮かんでくるようである。まさに沢幸さんが抱いた広大な構想の数々は国見山から見渡す大自然と住民が織りなす大パノラマによつて触発されたのである。

沢幸翁顕彰銅像建立記念誌『野に叫びあり』―沢幸・その人と生涯―昭和48年5月27日発行から抜粋

## 筆者プロフィール

故 藤原 八弥

大正3年東和町(現花巻市)生まれ。  
昭和4年東京美術学校(現東京芸術大学)、東京高等師範学校美術科卒業資格取得。  
教員をしながら画家を志し、一水会会員として民俗芸能・史蹟・名勝を描く。昭和45年立花に藤原美術館開館。昭和57年北上市市勢功労者表彰。平成10年没